



IIAS NEWSLETTER

1999年3月発行

国際高等研究所

「けいはんな学研都市」

国際高等研究所は、「人類の未来と幸福のために 何を研究すべきか」を研究することを基本理念として、新たな学問の 創造・進展を目指す「課題探索型」の基礎研究を行っています。

すなわち、人類の未来と幸福にとって不可欠な課題を発掘し、その問題解決に向かっての研究戦略を展開する中で、学術研究における新しい研究の萌芽、或いは新たな学問の立ち上げにより広く世界文化の発展に寄与することを目的としています。

目次

「学者村」から

IIASフェローシンポジウム開催報告

(「創造性・やる気につながる情報リテラシーを考える」 オーガナイザ：坂井利之)

掲示板 今後の予定 (1999年3月～5月)

最新研究報告 (1998年12月～1999年3月)

「学者村」から

内外の卓越した研究者を2ヶ月程度招へいする「IIASフェロー」として、1998年度は7名を招へいした。フェローの研究活動を中心に今年度の「学者村」を紹介します。

1998年秋、学者村は花盛り

高等研の「学者村構想」が実現に向け本格的に動きだした。文化勲章受賞者ら著名な学者5人が昨秋同時に「招へい学者(IIAS Fellow)」として招かれ、セミナーを開催したり、高等研プロジェクトの研究会への参加、学研都市内の研究所の研究者との交流、若手研究者への助言、一般向けの公開講演会の講師をつとめるなど積極的に活動された。また、高等研の静かな環境の中で、これまでの研究構想を練るなどゆったりとした充電の時間を楽しまれ、高等研がこの時期「学者村」となった。

「学者村構想」は初代の奥田東理事長が高等研の一つのあり方として掲げた。高等研に来れば、いつでも優れた研究者が何人かおり、研究についてだけでなく、いろいろなことについて話し合うことができる自由な雰囲気の場を「学者村」と表現した。奥田・元理事長

は高等研が学者の「赤ちょうちん」的な場になることを考えた。

そのような場を設けることによって、高等研にアカデミックな空気をかもしだし、自由な発想の学問が創造されやすくしようという狙いがあった。

昨秋、同時にフェローとして招かれたのは世界的な経済学者の森嶋通夫・ロンドン大学名誉教授、素粒子の研究で有名な理論物理学者の西島和彦・東京大学名誉教授、日本の情報工学の先駆者である坂井利之・京都大学名誉教授、超高層物理



沢田所長(右端)と歓談される、
左から坂井、西島、加藤、巽の各フェロー

学者の加藤進・京都大学名誉教授と高等研の前副所長で乱流の研究で有名な巽友正・京都大学名誉教授の5人。

自由な時間には各フェロー同士がお互いの研究につ
(次ページに続く)

いて話し合うなど、異分野の研究成果に興味深く耳を傾け、自らの研究に生かせるところは生かそうと意欲的に相互啓発を行われた。

研究だけではなく、高等研の所長、副所長らと高等研のこれからの方について意見交換をし、貴重な提言をされた。

また、各フェローの公開講演会には一般から多数の人が参加し、高等研への関心も深められた。

森嶋、加藤、西島の3人のフェローは夫婦で高等研敷地内の宿舎に滞在し、食事やパーティー、公開講演会などを通じ、家族間の交流を深められた。

1998年度には、秋の5人のフェローの他、1998年夏に梅原猛・国際日本文化研究センター名誉教授、1999年春にProf. Dr. Horst Albach フンボルト大学教授をフェローとして招へいした。

高等研ではさらにフェロー制度をうまく活用して「学者村」が実現するように努力するとともに、ホームページなどを通じて研究者だけではなく、一般の人とのコミュニケーションを深め、「人類の未来と幸福のため」の学問が創造されるように努めていく。

1998年度のフェロー活動を下表に示す。

1998年度IIASフェロー研究活動

梅原 猛	国際日本文化研究センター名誉教授：哲学		招へい期間：1998年6月1日～7月31日
	6月27日	公開講演会 「生物の歴史から見た人間の運命」	
坂井利之	京都大学名誉教授：情報通信工学		招へい期間：1998年8月20日～10月19日
	10月23日	シンポジウム 「創造性・やる気につながる情報リテラシーを考える —日本流情報リテラシーに向けて—」	
	11月28日	公開講演会 「情報とは何か—みんなの知識から私の知恵へ—」	
森嶋通夫	ロンドン大学名誉教授：理論経済学		招へい期間：1998年9月16日～11月15日
	9月29・30日	理論経済学研究会（置塩カンファレンス）	
	11月 6日	古代史研究会（講師：古田武彦昭和菜科大学名誉教授）	
	10月24日	公開講演会 「日本の成功と挫折」	
西島和彦	仁科記念財団理事長：原子核物理学、素粒子論		招へい期間：1998年9月22日～11月21日
	11月15日	セミナー 「量子場理論における対称性」	
	4月10日	公開講演会 「科学と技術の間」	
巽 泰正	京都大学名誉教授：流体物理学		招へい期間：1998年9月22日～11月21日
	11月 7日	公開講演会 「天災をどう考えるか—自然の災害と懸念—」	
	11月13・14日	研究会 「乱流の統計理論から統計力学へ」	
加藤 進	京都大学名誉教授：超高層物理学		招へい期間：1998年10月1日～11月30日
	11月27日	研究会 「東南アジアにおける地球環境変動の研究の行方」	
	5月 8日	公開講演会 「地球科学の進歩と限界」	
Pro.Dr. Horst Albach	フンボルト大学教授：経済学		招へい期間：1999年3月23日～4月5日
	3月27日	セミナー「組織学習；組織内および組織間における知識の創造、共有および移転」	
	4月 3日	シンポジウム 「日本企業のゆくえ」	

1999年度の予定

卓越した研究者の招へい事業

- 「招へい学者(IIAS Fellow)」として、内外の学者を10名程度招へい予定。
- 特別研究等に関連して「招へい研究者(IIAS Researcher)」として、若干名を委嘱予定。

若手研究者の育成事業

- 「特別研究員」として、1998年度からの継続2名に加えて2名の新規採用予定。
- 研究の促進と、若手研究者の育成を目的として1999年度より新設された「研究員」として、2名の新規採用予定。

IIASフェローシンポジウム開催報告 (1998年10月23日)

「創造性・やる気につながる情報リテラシーを考える」

オーガナイザ：坂井 利之

IIAS Fellow として滞在していた情報工学の坂井利之・京都大学名誉教授がこれからのコンピュータ、情報社会のあり方を探ろうと、シンポジウム「創造性・やる気につながる情報リテラシーを考える」 - 日本流情報リテラシーに向けて - を企画、昨年10月23日に高等研のレクチャーホールで開かれた。

工学系だけでなく社会学、経済学、生物学などさまざまな分野から参加があり、情報の氾濫する社会において、コンピュータを始めとする情報機器を使いながら、どのように情報とうまくつき合っていくかについて意見が交わされた。結論はでなかったものの、今後とも21世紀の望ましい情報社会を考えていくことになった。

坂井名誉教授がはじめに「情報リテラシー」について説明。リテラシーは日本語にすれば明治の初めに言われた「読み、書き、そろばん」であるが、コンピュータのキーボードをたたくだけで、字や絵が描け、計算ができるということだけでは情報リテラシーではない。

インターネットが普及し、コンピュータを介した情報の基本的な扱い方はもちろん、その情報をどのように利用し、どんなふうにこれからの社会、経済活動に活用していくのか、どのような影響が及ぶのかを、さまざまな側面から考えていく必要がある。さらに根源的に情報そのものについて

ても検討しなければならず、それらすべてを含めて「情報リテラシー」とした。

シンポジウムは2部に分かれ、1部は情報やプログラムの新しいとらえ方、2部では「読み、書き」に関して21世紀の情報社会のあり方が提起された。

吉田民人・中央大学教授（社会学）は社会情報学というベンチャー学問を立ち上げるために情報という言葉はキーワードになるとした。社会的なことはすべて情報という言葉で言い換えることができる。社会的活動はプログラムという言葉で表すことができる。「社会情報学」を立ち上げるために新しい情報概念を創出していく必要があるとした。

有本建男・日本原子力研究所部長（科学技術政策）は科学技術改革の面からみた情報リテラシーについて話した。これまでの科学技術情報は国家のものであった。しかし、国境を越えた環境問題などの出現と国家間がフレキシブルな関係になりつつある現在、科学技術革新についての情報は共有されなければならなくなってきた。21世紀に科学と社会が共生するためには情報を共通のものとするためのリテラシーが不可欠になってくる。

松原謙一・高等研副所長（分子生物学）はゲノム研究から情報というもののとらえかたを述べた。生物の進化中でもヒトのDNAは30億の文字に書き込まれている。これを解析することによって、進化の過程だけでなく、生物多様性のなぞが明らかになり、そのゲノム研究の成果が21世紀の人類に貢献するとした。

・松山隆司・京都大学教授（知能情報学）は人工知能を設計する立場から情報リテラシーを考察した。これまでの情報といえばコンピュータという「もの」に重点がおかれたきた。これからはその「もの」を使って「もの」と「もの」の関わりを考

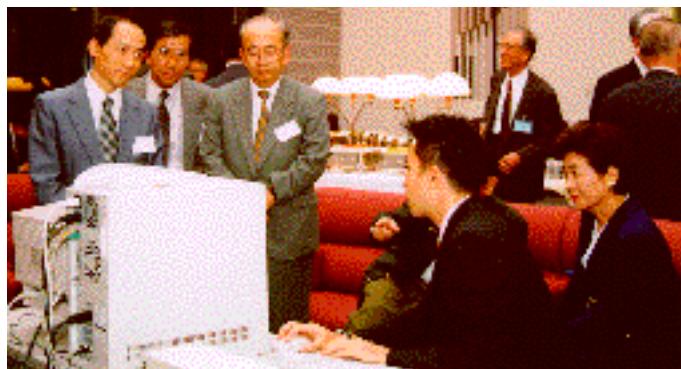
えていく必要性を強調。それを「こと」という言葉で表して、「こと起こし」の科学を立ち上げなければいけないとした。

鬼木甫・大阪大学名誉教授（情報経済学）は日本における文書のあり方を変えなければ21世紀の情報リテラシーはありえないとした。特に行政、司法などいわゆる「お役所言葉」は情報の伝達（コミュニケーション）を著しく阻害している。これからはいかにだれもが理解できる平易な文書にしていくことが情報社会に要求されたとした。

石田亨・京都大学教授（社会情報学）はインターネットの普及によりコンピュータは人々の社会活動の範囲を広げ、個人的なネットワークも広がっている。このように21世紀は情報ネットワークをうまく利用したメディアの時代になるとした。

山口修・大阪大学教授（音楽学）は人の感性と知性をつなぐ情報リテラシーについて、高等研で行われたプロジェクト「わざ学」の成果をもとに話した。人は音、光を感じることができる（感性）。それは、人が楽器を奏でたり、ライトを明滅させたりさまざまな技術

（次ページに続く）



同時開催された「サイバースペースでの実験」の
デモストレーション風景

を駆使してできることである（知性）。この二つをうまくつなげ、発展させることができがコンピュータによって可能になってくるとした。

大隅紀和・京都教育大学教授（教育方法論）は教育におけるコンピュータの活用についての展望をまとめた。すでに教育にはコンピュータがかなり導入されているが、いまだにコンピュータに操られている状況で

あると分析。これからは、学ぶ側に立った方法論の確立が重要になるととした。

これらを受けて、坂井名誉教授は情報リテラシーを考えることは「人間とは何か」を考える哲学と同じで、なかなか結論はでないが、21世紀の世界を考えるには重要なテーマであるといえるとした。

（文責・事務局）

掲示板

◎今後の予定（会場は原則として高等研）1999年3月～1999年5月

月日	プロジェクト名	オーガナイザ
3月16日（水）	「物質科学の新しい展開を目指して」第7回研究会（準備研究）	金森順次郎 (特別委員/大阪大学前総長)
3月19日（金）～20日（土）	「科学の文化的基底」第9回研究会	伊東俊太郎 (特別委員/獨澤大学比較文明研究センター所長)
3月25日（木）	「情報市場における近未来の法モデル」研究会	北川善太郎 (国際高等研究所副所長)
3月26日（金）	「環境と金糧生産の調和に関する研究－人類生存の視野から」第9回研究会	渡部忠世 (企画委員/京都大学名誉教授)
4月10日（土）	IIASフェロー公開講演会 「科学と技術の間」	西島和彦（仁科記念財団理事長）
5月8日（土）	IIASフェロー公開講演会 「地球科学の進歩と限界」	加藤進（京都大学名誉教授）

◎最新研究報告：1998年12月～1999年3月

報告No.	タイトル	発行	プロジェクト名	著者・代表者
1998-005	比較幸福学研究会会議録：資料編	1999.03	比較幸福学	
1998-008	安全科学「医療の安全」	1999.03	安全科学	村上陽一郎
1998-009	安全科学「安全から見た次代都市への移行プログラム」	1999.03	安全科学	岩崎 勉
1998-010	安全科学「安全学とプログラム型国際政治学」	1999.03	安全科学	柴師寺泰哉
1998-011	「沼」記念プロジェクト	1999.03	「沼」記念プロジェクト	中西重忠
1998-012	情報論的転回	1999.03	情報論的転回	吉田民人
1998-013	比較幸福学	1999.03	比較幸福学	中川久定
1998-014	学術フォーラム「数学者のための場の理論入門」	1999.03	数研共同研究	Ludwig FADDEEV, Tetsuji MIZRA(ed.)

お詫びと訂正

IIAS NEWSLETTER No.8掲載のシンポジウム「中国の食糧と環境問題」の記事の中で、富本幾文氏と北野尚宏主任研究員の写真と名前が入れ替わっています。正しくは、右のようになります。
お詫びとともに訂正いたします。



富本幾文氏



北野尚宏主任研究員

お問い合わせ

国際高等研究所



International Institute for Advanced Studies

編集・発行 / 国際高等研究所

〒619-0225 京都府相楽郡木津町木津川台9-3

TEL: 0774-73-4001 FAX: 0774-73-4005

<http://www.iias.or.jp/> e-mail: www_admin@iias.or.jp